あの子は空から微笑んだ

小宮つばさ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
あの子は空から微笑んだ

【Ｎコード】
Ｎ３２４７Ｂ

【作者名】
小宮つばさ

【あらすじ】
初めて同じクラスになった”その子”は、地味で特別かわいいわけでもないし、話もしたことがなかった。でも、私は”その子”を気にせずにはいられないのだ。

その子は、私が三年になって初めて同じクラスになった。
他のクラスに興味がない私は、同じクラスになるまでその子のことは知らなかった。
一番後ろの席だった。
不思議な子だった。
茶色の短い髪。
特別白いわけでもなく、焼けているわけでもない肌。
特別、可愛いとかそういう子ではなかった。
平凡な、おとなしい子、のはずなのに…
なにかとても神秘的だったのだ。
私は、気が付いたらその子のことを見ていた。
私は確かに、見とれていたのだ。その子に。
目が合うこともあった。
そうするとその子はにっこりと微笑むのだ。
私もついにっこりと微笑みかえしてしまう。
でも、二学期が終わる今日まで、私はその子と話をしたこともなかった。
声も知らなかった。
名前も、なぜか知らなかったし、知ろうとも思わなかった。
下校時間になると、いつの間にかその子はいない。
でも、今日は違ったのだ。
友人と一緒に歩いていると、目の前にその子がいた。

「ねえ、あの子…」

「あの子？前の？」

「同じクラスのさ…」

「え？あんな子いたっけ？」

友人は真顔でそう言った。
きっと、この友人以外の人に言っても同じ答えが返ってくるのだろう。
あの子が誰かと話しているところなんて見たことがなかったから。
班で話し合いをしているとき、あの子はいなかったような気がする。
授業中、先生にあてられたところも見たことがなかった。
あの子の存在に気がついていたのは、私だけかもしれない。

「バイバイ」

「うん、じゃあ来年。よいお年を」

分かれ道で友人と別れてから、ふと前を見ると、あの子がマンションに入って行った。
（ここに住んでるのかな？）
そう思って、何故か私はついていってしまった。
こそこそついていくわけでもなく、かといって友達の後ろをついていくように行くわけでもなく、ただついて行った。
階段を上がっていくその子に、ただついて行った。
何階上がったか分からない。
そして屋上についてしまったのだ。
立入禁止のはずの屋上の扉は、鍵がかかっていなかった。
小走りでその子は屋上のフェンスまで行った。

「何、してるの？」

つい、私は言ってしまった。
その子は、私に振り向いてにっこりと微笑んだ。
そして、深呼吸をして空をあおぎ、答えた。

「聞いてるの」

初めて聞く、その子の声。
特に魅力的というわけでもない、普通の声。
でも、なんて透き通った声なんだろうと思ったのだ。

「聞いてるの？」

「そう。
水の声、風の声、空の声、星の声、雲の声、太陽の声…」

聞いたらばかばかしいと思うだろう。
何を言っているんだと、思ってしまうだろう。
でも、この子が言うとなぜか全くそうは思わなかった。
その子は、空を指さした。
見るとそこには、

「ひこうき雲？」

「そう。きれい」

うっとりとした表情でその子は言った。
ひこうき雲は、この子に似ていた。
なんのことはない、地味なもの。
でも何か、不思議な、ひきつけるものがある。

「わたし、空を飛ぶの」

「空を飛びたいの？」

「ううん。飛ぶの」

そして空を指差し、ゆっくりと空中に線を描いた。

「ウィーーーーン―…
ウィーーーーン―…ってね」

この子なら、本当に飛べるのかもしれないと心から思ってしまった。
とん、とその子はフェンスの上に立って私を見おろした。
自分の背丈よりも高いフェンスの上へ、簡単にその子は乗った。

「ウィーーーーン―…ってね」

私は、とっさに走り出した。
でも、足が思うように動かない。
その子はにっこりと笑って自らの重心をかかとへかけた。

「飛ぶの。わたし」

時間が、ゆっくりと流れて…
その子は落ちた。
私はフェンスを掴んで下を見た。
そしてその瞬間―…
下から強風が吹いてきた。
そして頭上を見上げると、鳥がいた。
茶色い、地味な色の鳥。

でも、なにかひきつける不思議な鳥。
その鳥の姿は、鮮明に覚えている。
それから私はたくさんの鳥の図鑑を見た。
でも、その鳥はどこにも見当たらなかった。
新学期―…
私のクラスは、三十八人から三十七人になった。
あの子が、いなくなったのだ。
なにも、なにも変わらなかった。
先生も何も言わなかった。
まるで、元からあの子なんていなかったかのように。
いや、いなかったのかもしれない。
いないのが、当たり前になってしまった。
そして、ある日の帰り―…
小さな女の子に出会った。
茶色い髪の、地味な子。
でも、神秘的な不思議な子。

「ウィーーーーン―…」

そう言いながら、女の子は走って行った。
こんなこと、前にもあったような気がする。
でも、思い出せない。
いや、そんなことはなかったのかもしれない。
女の子は振り向いて私にこう言った。

「ウィーーーーーン―…ってね。飛ぶの」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3247b/

あの子は空から微笑んだ

2011年2月16日07時23分発行